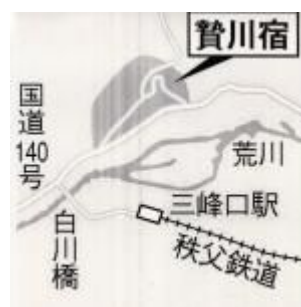


## 縁側活用にぎわい再び



三峯神社の参拝や秩父札所への巡礼に向かう旅人が集まった贄川宿（手前）

熊谷と甲府を結ぶ秩父往還の主要な宿場として、江戸時代からにぎわった奥秩父・荒川贄川（にえがわ）（旧荒川村）の〈贄川宿〉。国道140号から北に入った幅約4メートルの旧街道の両側に、趣のある木造家屋二十数軒が立ち並ぶ。

「三峰山の三峯神社の参詣（さんけい）客の宿場として繁盛し、三十一番札所へ向かう荒川の渡しもあったそうです」と荒川商工会事務局長の逸見容明（よしあき）さん（52）は説明する。逸見さんの自宅も築100年以上。1919年（大正8年）ごろまで「角屋（かどや）」という屋号の旅館だった。

それぞれの家には、街道に面して縁側があった。付近の区長を務める新井亜起男さん（64）にとって、明かり取りのため開け放たれた縁側に老人が腰掛け、話に花を咲かせる姿はなじみのものだった。「子供にとっても格好の遊び場。色々な人が集まって来て、半ばパブリックな場所だった」と思い出す。

最盛期に20軒以上の旅館があったという宿場も、荒川に白川橋が架かった昭和の初めごろから、徐々に廃れた。改築で縁側も減り、秩父市街へ勤めに出る人が増えて雨戸が閉め切りにされる家も目立つ。

野坂町で喫茶店「木亭」を経営する塚越康一さん（64）は同地区に残る縁側に着目。90年、当時の区長横田善行さん（66）を通じて住民に諮ってもらい、秩父地域で活動する芸術家の作品を展示する「秋の縁側展」を実現させた。

「昔ながらの町並みの懐かしさを多くの人に感じてもらいたい」。宮原茂仁さん（63）らも贄川宿保存会を結成して駐車場の確保などに協力した。

「これまで何もなかった通りに、たくさんのお客さんを迎えた時はうれしかった」。高校卒業後、都内で公務員として勤め、2002年に戻ってきた4代目保存会会長の逸見宣也さん（68）は話す。

縁側展は、紅葉が始まる毎年11月第2週の週末に開催。この日ばかりは昔のように各戸の縁側の雨戸が開け放たれ、05年は約7000人が訪れた。小さな集落にとって、いまや最大のイベントだ。

69年ごろまで宿場最後の宿だった民宿「逸見館」を義母逸見マヨさん（1979年死去）と切り盛りしていた逸見ミカさん（70）は、毎回、見晴らしの良い庭でうどんやそばを販売している。「これで贄川に観光客が集まるようになれば。また民宿を再開したくなってしまいかもね」。にぎわいを思い出し、笑顔がこぼれた。

**秩父の逸見家住宅主屋、国の登録有形文化財に** 産経新聞 2008.12.12 15:26 より



**国の登録有形文化財(建造物)に登録された埼玉県秩父市の「逸見家住宅主屋」(県教委提供)**

宿場町のおもかげを伝える埼玉県秩父市荒川贄川(にえがわ)の「逸見(へんみ)家住宅主屋」が12日、国の登録有形文化財(建造物)になることが決まった。国の文化審議会が塩谷立文部科学相に答申した。これにより県内の登録有形文化財の建造物は124件になる。

逸見家住宅は、明治11(1878)年以前に建てられたとみられる木造2階建て住宅。江戸時代後期から明治時代に、熊谷(埼玉県)と甲府(山梨県)を結ぶ宿場町「贄川宿」としてにぎわった場所にある。逸見家は、住宅2階で宿や養蚕を営んでいた。2階は通常の養蚕住宅と異なって細かく部屋割りされており、畳敷きの痕跡もある。

審議会では、養蚕住宅としての価値や、歴史的な宿場町の景観をつくっていることが評価された。贄川宿には現在、通り沿いに20軒ほどの明治、大正時代の住宅が並んでいる。11月には住宅の縁側を利用した展覧会を開催した。秩父市教育委員会は、「この機会に、贄川宿全体や建物を見てもらえるようになれば」と、観光振興にも期待している。

登録有形文化財に登録されると、保存や活用のために改修する際、設計管理費の半分が国から補助されるなどの優遇措置がある。